

大濱信泉プロジェクト『勇気づけの教育』の推進 (27)



～ レジリエンス「折れない心」を育てよう ～

石垣市教育委員会 学校教育課長 前三盛 敦

子どもたちにたくさんの経験を通して心も体も成長してほしい。親ならすべての方がそう思うことでしょう。しかし、子どもたちがこれから出会う経験の中には、うまくいかないことやできないこと、失敗なども数多くあると思います。このような日々の困難を乗り越えていくにはどのような力が必要なのでしょう。

最近注目されている「レジリエンス」という言葉を聞いたことがありますか。一般的に「回復力」「復元力」と訳されますが、もっとわかりやすく言えば「折れにくい心」となります。「レジリエンス」は心の筋肉とも言われ、力が加えられて大きく曲がっても、また元に戻る竹のようにしなやかな心を表します。

では、「レジリエンス」はどうすれば身につけることができるのでしょうか。「レジリエンス」を身につける機会は普段の生活の中にたくさんありますが、実は親があらゆる場面で先回りして手を貸しすぎると、「レジリエンス」が育ちにくくなってしまいます。また、最近は公園をはじめ、子どもを取り巻く環境でも禁止事項が多く、「それをしてはしてはいけない」と子どもたちに行動制限をかける場面が増えているため、「レジリエンス」が育ちにくくなっているとも言われています。

「失敗は成功のもと」と言われるように、失敗は成長の糧となります。自分のトラブルの場面からたくさんのことを学ぶことができるのです。例えば、誰もが小さい頃、砂場や海辺で大きな山をつくったり、その山にトンネルを掘ってつなげたりした経験があると思います。その時どんなトラブルがありましたか。友達がいきなり山を壊してしまったこと、作業途中、偶然顔にかかった砂のせいで砂のかけ合いになったこと、スコップ等の貸し借りができずケンカになったことはありませんでしたか。また、ブランコの順番待ちや乗り方でも、シーソーや滑り台、ジャングルジム、鉄棒遊びでも、様々なトラブルが起きたことだと思います。遊ぶことに集中している子どもの世界では、これらのトラブルはあたり前のことなのです。このような場面は、実際に遭遇して、嫌な気持ちになったり相手を怒らせたりして、はじめて本当の意味で理解できるのではないのでしょうか。最初から親がよかれと思い止めてしまうと、自分の負の感情を感じることや、怒りの感情をコントロールすること、トラブルを解決するために立ち向かうチャンスがなくなってしまう。成長段階の実際のトラブルの場面でこそ、子どもたちがそれを乗り越える力を身につけていくのです。

考えてみると、昭和世代の私たちの小さい頃は、遊びの中に親はいませんでした。また、子ども同士の遊びに首を突っ込む大人もいませんでした。思いっきり泣いたり、文句を言ったりよくケンカもしたものです。今では、子どもが遊んでるそばに、ほとんど親がついています。不審者の問題もありますし、わざとではなくても誰かを傷つけたり、けがをさせたり物を壊したりした場合、クレームの多さや管理責任が過度に追及される社会風潮が背景にあるので、多少過剰な保護はいたしかたない部分もありますが、親がまず、子どもを大きな心で見守ることが大事なのではないのでしょうか。失敗して学ぶのが人間であり、未熟な部分をぶつけ合うことが子どもにとっては大切な学びだからです。ですから、できるだけ子どものトラブルの芽を先回りして摘み取ってしまう過干渉はやめて、子どもがどのようにトラブルや困難

に対応するのか、それをどのように乗り越えるのかを見守るようにしたいものです。

親として大切なのは、普段から子どものことを温かいまなざしでよく観察し、話を聞き、トラブルの場面でネガティブな感情を確認したときは、「それは、痛かったね」「つらかったね」「悔しかったね」と共感し、寄り添ってあげることです。そして、子どもの様子を見ながら「そんなときはどうしたらいいと思う？」と尋ねたり、「こうしてみたらどう？」と具体的に提案してあげたりすることで、次に同じような場面に出会った時に乗り越える力が身につくのです。つまり、レジリエンス「折れない心は」は、親の温かい見守りの中で、思いっきり失敗し、挑戦する経験を通して育っていくのではないのでしょうか。